

あけましておめでとうございます。酉年のお正月でございます。今年もよろしくつ。というわけで、新年のご挨拶が終わったところで、どうやって本題に入ろうかと思案していると、ふと気がついたのだった。今回はなんと、この「ラクゴ・ザ・フューチャー」連載八十回目ではないか。

八十回というのは縁起がいい数字である。八は末広がり、昔からラッキーナンバーとして知られているし、うっかり八兵衛、ガラツハの八五郎、たこ八郎……など、名前に八がついたひとには有名人が多い。八代將軍吉宗は江戸幕府を立て直して善政をしいたし、サイボーグ008は一番地味な半魚人だが意外にファンが多いらしい。今年も平成17年だが、1と7を足せば8となるではないか。平成十七年の正月に第八十回を迎えるなんて、こいつあ春から縁起がええわい。

末尾に「っ」をつけるのにもいいかげん飽きてきたので、ふつうに戻すが、一口に八十回というが、なかなかこれはたいへんである。この連載は一回最低十枚、あとはどれほど長くなっても可、ただし原稿料は同一、という決まりになっていて、毎回、十枚は書いているのだが、ときとして長くなり、一番長かった回は四十枚近かったし、平均十五〜二十枚は書いているのではないだろうか。つまり、現在までの積算はおよそ千数百枚ということになり、ちよつとした本三冊分ぐらいあるのである。いかながなもんでしようね、この「ラクゴ・ザ・フューチャー」を活字本にしてやろうという奇特なカタ

はいらっしやいませんか。うーん、そういつひとを探すのは、飛行機のなかで「このなかに産婦人科のお医者さまはいらっしやいませんか」と探すよりももっと困難かもしれぬ。

こうなったら自費出版して、産婦人科の待合室にでも置いてもらおうかしら、などとわけのわからんことを考えている。

今年の干支は酉である。酉というのは、ニワトリである。

せつかくの八十回記念なので、ちよつと新年の言祝ぎを、マンガ日本昔話風にお送りしたい。題して、「キツネどんとトリどん」。

キツネ「おや、そこへ行くのはトリどんやないかコン」

トリ「うわっ、いやなやつに会つてもた」

キツネ「何か言つたかコン」

トリ「いや、何もおまへん。キツネどんはこんな海辺で何をしてはるんです」

キツネ「お正月で暇なので、ぶらぶら散歩してたコン。

トリどんは何をしてるコン」

トリ「親戚がこのあたりにいてはるんで、新年のあいさつに来ましてん」

キツネ「ふーん、そうかコン。なんだかおなかがすいてきたコン」

トリ「そーら、きた」

キツネ「何か言つたかコン」

トリ「いや、何もおまへん。ほな、私はこのへんで……」

キツネ「そう急ぐなコン。もっとゆっくりしていつたらええコン」

トリ「なかなかそうもいきまへんねん。そこ、通しておくれやす」

キツネ「うーん、おなかがすいてきたコン。なにか食べたいコン……」

トリ「じゃあ、キツネどん、今年もよろしゅうお願いします。さいならー」

キツネ「待つコン。逃がすかコン。食べてやるコン」
トリ「うわー、助けてーっ」

ポセイドン「こらあつ、うちの親戚に何するかあつ」

キツネ「どひゃあ、なんだかでかいやつが海から出てきたコン。な、な、なんやおまえは」

ポセイドン「わしはポセイドン。海の王様じゃあ。わしの親戚に手を出すようなやつはひねりつぶしてやる」

キツネ「助けてほしいコン。ほんの冗談のつもりやったコン。さよならコン」

イタチ「おおい、そこへ行くのはキツネどんじゃないか。汗かいて、どうしたんじゃ」

キツネ「今、ちよつとひどい目にあつたんやコン」

イタチ「ふーん、ところで海に魚釣りにいかないか」

キツネ「いやー、海はもうこりこりだコン」

イタチ「どうして」

キツネ「あそこには、ポセイドンがおりはるコン」

.....

長いわりにいまいちでしたね。というわけで、今回もはじまる「上方落語の歴史」、今回は第五回で最終回である。はじまりはじまり。

前回は、初代桂春団治の死去から、次第に戦争の影が濃くなっていき、衰退の一途をたどっていくというあたりまでだったがその続きである。

いつ終わるともわからない太平洋戦争がはじまり、上方落語の命運はほとんど風前のともしびとなった。そういう状況に危機感をもった五代目笑福亭松鶴は、吉本興業を辞め、二代目桂春団治、桂米団治らと「楽語荘」というグループを

結成した。明日、自分の命があるかどうかや、国の命運すら一寸先もわからない戦時下に、彼らは「上方ばなしをきく会」という落語会を続けて開催し、また、「上方ばなし」という雑誌を発行した。吉本を辞めた時点で収入がなくなっているにもかかわらず、彼らは上方落語を守るために必死の努力を続けたのである。とくに、「上方ばなし」は、戦争中で紙がない中、四十九号まで発行された（戦争による紙の統制によって廃刊に追い込まれた）。これに掲載された上方落語の速記は、戦後、大師匠たちが亡くなっている状態で、古い落語を復活させる際にたいへん貴重な資料となった。この雑誌を出し続けた五代目松鶴の熱意にはおそれいるしかない。

ようやく戦争は終わったものの、昭和二十五年に五代目松鶴が亡くなったのを皮切り、米団治、立花家花橘、林家染丸、二代目春団治、四代目文団治、花月亭九里丸などの大御所が相次いで亡くなった。長い戦争が彼らの健康をむしばんでいたためであろう。ただでさえ層の薄かった上方落語界は灯が消えたようになり、

「上方落語は滅んだ」

と言われた。残っていたのは、引退状態にあった橘円都ら数名の古老と、まだ入門したての、若い若い噺家数名にすぎなかったのだから、これは非常に妥当な意見であったわけだ。

この「若い若い噺家」のひとりに桂米朝がいた。彼は、東京の正岡容（演芸評論家、作家）のもとに弟子入りして、落語や寄席文化について学んでいたが、滅びつつある上方落語をなんとかしなくてはという義務感にかられて、桂米朝の弟子となった。この桂米朝が、父親である五代目松鶴の付き人をしていて、のちの六代目松鶴や、二代目春団治の実子であるのちの三代目春団治、踊りを習う「ついで」に落語を学ぶ気になった、のちの桂文枝、また、露の五郎、笑福亭松之

助らとともに、上方落語の伝統を継承する努力をはじめたのである。一旦、滅びかけたものをふたたび盛んにするには、気の遠くなるような、こつこつとした努力が必要であり、彼らも最初のうちは、「盛んにする」というよりも、「細々とでも、なんとかつなげていく」という気持ちだっただろう。

それが、ネタを当時まだ健在だった古老にきいたり、「上方ばなし」の速記を頼りにして掘り起こしたりしているうちに、民間放送がはじまり、次第にファンも増え、また、入門志願者も増えていったのである。しかし、戦後まもないころ、ほとんどの先輩が亡くなつたなかで、なんとか上方落語を絶やさないうようにしたいという絶望的な戦いをはじめたとき、米朝たちの頭には、まさか上方落語が今日のようにふたたびの隆盛を見るとは思つてもいなかっただろう。ましてや、彼の落語全集のLPがベストセラーになつたり、大きなホールに客があふれたり、自身が人間国宝になるなどは想像もしていなかつたにちがいない。すべては、「なんとか上方落語を継承しなくては」という熱い思いが、ここまでにしたのである。彼らの落語への情熱と結束こそが何もかも原動力だったのである。

その後、六代目松鶴の弟子に笑福亭仁鶴が出、米朝の弟子に枝雀、ざこばが出、桂文枝の弟子に桂三枝、文珍が出、桂春団治の弟子に、福団治、春蝶が出、林家染丸の弟子に小染が出……それぞれのキャラクターを、寄席や落語会にとどまらず、テレビ、ラジオに展開していつて、上方落語は百花繚乱の時代を迎えるのである。

今、上方落語の噺家は約二百人いるという。古典一筋で、落語会を中心に地道な活動をしているもの、新作に活路を見いだしているもの、落語はあまりせず、マスコミでのタレント活動が中心のもの……さまざまなやりかたで皆、試行錯誤

しながらも、「桂」や「笑福亭」、「林家」、「月亭」……といった屋号を背負って、落語家として生きているのである。

よく、タレント的な活動が目立つ噺家に対して、あいつらテレビに出てるだけで、落語なんかしてないんだよ、寄席なんか出てないんだよ、という人がいるが、それはまちがいである。そもそも上方には東京のような「寄席」はない。噺家たちは、自分らの手で、落語ができる場所を開拓していくしかない。それは、寺や神社だったり、公民館や小さなホールであったり、料理屋やそば屋、喫茶店であったり、ライブハウスであったり、いろいろである。もちろん東京の噺家たちも、そういった活動をしているが、彼らには「定席」があり、上方にはそれが無い、というのは大きな違いである。たとえば、「ぴあ」やインターネットの落語会情報をたんねんに探せば、関西のいたるところで、毎日毎日たくさん落語会が開催されていることを知ることができる。千人以上入るホールもあれば、三十人でぎゅうぎゅうの場所での会もある。そういったところに出演している噺家のなかに、テレビで名前が売れている有名なタレント落語家たちの名前を見いだせるはずだ。彼らもまた、噺家として、大小の落語会に出演しているのである。多くのひとは、テレビで落語をしないと、「落語をしている噺家」という認識にならないようだが、実際は、タレント的な噺家の多くが、地味な場所での落語会の仕事を大事にしているのだ。テレビ、ラジオなどであれだけ多忙をきわめている笑福亭鶴瓶も、年間数十本の落語会に出演し、また、若手の会にひょっこり現れては古典や新作を演じている。

上方落語の将来がどうなるか、それはわからない。いろいろと憂慮すべき問題も多いと思われる。落語ができる場所に比して、噺家の数が多すぎるかもしれない。底辺が広がりにぎて、個性を確立できていない噺家が増えてきているかもしれ

れない。古典の内容がだんだん理解しづらくなってきたり
 かもしれない。しかし、私は「今」の上方落語の状況が、上
 方落語の噺家が好きだ。安泰とは思えない上方落語の現状で
 はあるが、戦後すぐのことを思えば、少なくとも「滅びる」
 心配はなさそうだ。あとは、いかに継承していくか、新しい
 風を入れていくか、という問題はあるけれど、多くの噺家が
 そのことで悩み、苦しみ、努力しているのだから、「何とか
 なるやろ」と思う。

落語は、古典芸能か、それとも現代の笑芸か、ということ
 がよく議論されるが、私にとっては、落語はちょうどその中
 間にあり、どちらもの性格をもっているからこそおもしろい
 のだと思う。

上方落語協会の桂三枝会長の骨折りで、まもなく念願の
 「上方落語の定席」が天満にできるといふ。今、上方落語は
 「熱い」のである。これを読んでいる皆さんに、一度でいい
 から上方落語の「生」を体験してほしい、とセツに願う次第
 である。言つてくだされば、ええ落語会、教えまっせ。

（了）